（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	山本　直輝
論文題目	１８世紀オスマン朝アラブのイブン・アラビー学派によるイスラーム伝統擁護 ―アブドゥルガニー・ナーブルスィーの存在一性論―		

（論文内容の要旨）

本論文は18世紀オスマン朝下アラブ世界に生きたイブン・アラビー学派の思想家アブドゥルガニー・ナーブルスィー（‘Abd al-Ghanī al-Nābulusī, d. 1731）のイスラーム思想を、新しい視点から分析しようとするものである。イスラーム思想史においてナーブルスィーは、18世紀を代表するイブン・アラビー学派の思想家と認められながらも、先行研究では彼の思想の独自性については明らかにされていなかった。

本論文は、この独自性を明らかにするため、ふたつの分析視角を用いている。一つ目は伝統的イスラーム学全体のなかにスーフィズムを位置づける視角であり、二つ目はスーフィズム内部の存在論と実践論の照応という視角である。

本論文は、序論・結論と、前提的知識を扱う第一部、第一の視角を扱う第二部、第二の視角を扱う第三部から成り立っている。第一部は、ナーブルスィーの生涯を記述する第一章と、研究史と問題設定を述べる第二章からなる。第一章は、彼がスーフィズムの中のイブン・アラビー学派の思想家として有名なだけでなく、18世紀の法学・神学を代表する思想家でもあったことを述べる。第二章は、ナーブルスィーについての先行研究を検討し、スーフィズム思想の枠組にとらわれることなく、法学・神学をも含めた伝統的イスラーム学の全体像のなかに位置づけるべきであると提唱する。

第二部は、伝統的イスラーム学の中の法学に着目し、墓参詣を具体的事例に取り上げた第三章と、神学に着目し、人間の行為主体性を事例に取り上げた第四章からなる。第三章は、死者であろうともあらゆる被造物は敬意を示されねばならないとの理由から、ナーブルスィーが墓参詣をめぐるあらゆる慣行を支持したことを述べる。さらに、生前イスラーム法を守りながらスーフィズムの修行を重ねた死者は死後霊的に高次の存在となるなど、彼独自の死生観を確認している。

第四章は、「人間はアッラーの許可によって外界への影響力を持つ」というテーゼに対するナーブルスィーの反論を取り上げる。彼は存在一性論の立場から、人間の行為は全てアッラーの自己顕現の結果であり、存在論的次元において人間はいかなる主体性も持ちえないが、神から発せられる規範命令たるシャリーアに応えるとき、主体的にその行為を選び取ると述べている。

第三部は、存在一性論の存在論を扱う第五章と、修行論を扱う第六章からなる。第五章は、ナーブルスィーの五次元の存在階梯論を分析する。人間は存在・非存在の間を行き来する第四次元に属しているが、自らの根源である虚無性に対する無知、自ら

がアッラーと同じような形で存在しているという誤解をナーブルスィーは「罪」と名付けた。ナーブルスィーにとって存在階梯論は、この人間の抱える罪を説くためのものであり、人間にはこの罪を克服するための実践が求められる。

第六章は、罪を生み出す自我や我欲を滅却するための実践論について論じている。ナーブルスィーはナクシュバンディー教団の修行をこの自我の克服の修行法として紹介し、信仰告白の言葉「神は無し。しかしアッラーは存在する」が、被造物の本質は虚無であり真に存在するのはアッラーのみであることを示しており、この言葉を祈祷で唱えることで人間は自我を徐々に滅却することができると説いている。また、存在論と修行論では共通したテーマが論じられており、ナーブルスィーにおいて存在階梯論とスーフィー教団の修行論が結びついていることが確認できる。

これらの議論をふまえて結論では、法学、神学、スーフィズムの存在論と修行論のどの議論においても、ナーブルスィーの世界観が通底して存在していることを明らかにしている。その世界観こそが彼の理解する存在一性論なのである。そこでは、万物は全てその根源は虚無にしか過ぎないという自覚を通じて被造物と自己存在を徹底して否定した極致に、アッラーの唯一絶対なる存在と向き合う。そしてアッラーからの命令に応えたとき、人は神の意志を写し姿として自己の存在を肯定するに至るのである。